

3.3. 評価結果 2：ネパール村落振興・森林保全計画（第二フェーズ）

ネパール村落振興・森林保全計画（以下ネパール村落振興）は、第一フェーズが 1994 年～1999 年、第二フェーズが 1999 年～2004 年に実施され、2004 年 7 月～2005 年 7 月がフォローアップフェーズとなっている。ネパール中西部の中山間地域であるカスキ、バルバットの 2 郡を対象に実施された技術協力プロジェクトである。

第一フェーズは JICA の住民参加型案件の先駆けとして、また青年海外協力隊のチーム派遣である「緑の推進協力計画」⁴⁰とのパッケージ協力として、「住民の自主的な活動による生活水準の向上と、それによる自然環境の向上と土地生産力の向上」を目指して実施された。第二フェーズは、その経験を踏まえ⁴¹、住民の事業の計画から評価までの積極的参加を伴う住民参加型の村落資源管理モデルの開発を目指した。本評価では、第二フェーズを対象とした。

本案件では、ジェンダー視点はプロジェクトの重要要素であると位置づけられており、長期のジェンダー分野の専門家が 2 年ごとに継続して配置されていた。そのため、積極的にジェンダー視点に立った取り組みがおこなわれた案件として重要な分析対象であると考え、事例研究の対象とした。

事例研究では、情報収集上の制約から、案件対象地域 2 郡（District）の 10 村（VDC）⁴²のうち、2 ワード（Ward）⁴³のみを本評価の対象地域とした。ワードの主な選定基準は、本評価の調査目的とインタビュー調査の実施可能性を考慮して、①住民男女による地域開発活動が現在でも継続されており活発であること、②カースト構成が異なるワードであること、③治安が比較的安定していること、の 3 点である。

3.3.1. 案件の概要と実施プロセスの分析

本項では、ネパール村落振興の概要と、住民参加とジェンダー視点の位置づけを記載する。その後、プロジェクトの活動内容を住民参加とジェンダー視点に留意しながら分析する。

⁴⁰ 対象 10 村に一名ずつ隊員が派遣され、ネパール人 NGO ボランティア、郡土壌保全事務所中堅技術者（MLT）とチームになり、地域に常駐し、対象地域のニーズに沿った村落振興活動（地域開発事業）の実施を支援した。国際協力事業団（1999）p より

⁴¹ 治安の関係により、第二フェーズでは、青年海外協力隊とのパッケージ協力は継続されなかった。

⁴² VDC: Village Development Committee とは、村落開発委員会の略。村レベルの行政単位を指す際にも使われる。

⁴³ Ward とは、村以下の行政単位である。1 村（VDC）は 9 ワードから構成される。文中の図 3-8 を参照。

(1) 案件の概要

ネパール村落振興の概要は、表 3-9 のとおりである。

表 3-9：ネパール村落振興・森林保全計画 フェーズ 2 の概要

協力期間	1999 年 7 月～2004 年 7 月 (フォローアップフェーズ:2004 年 7 月～2005 年 7 月)
活動実施機関	森林土壌保全省土壌保全流域管理局 (DSCO)
プロジェクト目標	ネパールの山間地域に適用可能な、住民による企画、実行、モニタリング評価への積極的な参加を伴う、公正で持続的な住民参加型・村落資源管理モデルを開発する。
成果	1) カスキ郡及びパルパット郡のプロジェクト対象村において、 1-a) 対象地域の住民が、自分達の組織を作り、運営する能力を持つ。 1-b) 対象地域の住民が、村落資源を持続的に管理、計画、実施、評価することが可能となる。 1-c) プロジェクトのモデル全体に社会・ジェンダー配慮の視点を反映させる 2) カウンターパートに、 2-a) 村落レベルの流域管理見通しを作成する能力が移転される。 2-b) 丘陵地帯での参加型村落資源管理プロジェクトの実施能力が強化される。
上位目標	住民男女による村落資源の適正な管理を通じて、ネパール山間地域における貧困を緩和し自然環境を改善する。
対象地域	カスキ郡およびパルパット郡の各 5 村 (VDC) ⁴⁴ * 本評価対象はそのうちカスキ郡ブムディブムディ村 (VDC) のワード 1 と 6

出典:国際協力機構(2004)f より作成

(2) 住民参加とジェンダー視点の位置づけ

本案件では、プロジェクト目標である村落資源管理モデルの策定が、住民による企画から評価までの参加を伴うものになるというのが、住民参加型アプローチの考え方である。特に、計画段階への参加と事業実施への主体的参加を通じて、住民が組織運営や、地域社会開発の計画からモニタリングまでおこなうための能力向上をすることが期待された。

「事業運営ガイドライン」⁴⁵では、プロジェクトの基本コンセプトの一つとして、住民参加型のアプローチが重視されている。ここでは、「プロジェクトの最も重要な概念は、住民が村落資源を活用して生活しているがゆえに、住民自らが問題を把握し解決する能力を高めることが、持続的な村落資源管理のために必要不可欠であるとの認識である。プロジェクトは、各般にわたるサブプロジェクト(地域社会開発事業)を通じて、住民を支援するが、その際は、常に住民参加型アプローチを貫く。このため、すべてのプロジェクトの活動は、住民の主体的な参加によって進められることとし、かつ、それを助長するものでなければ

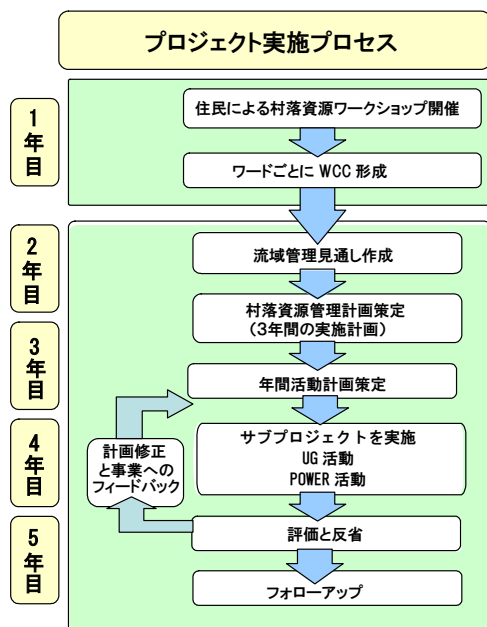
⁴⁴ 対象地域は、第一フェーズと第二フェーズは異なる。

⁴⁵ 事業運営ガイドライン(Operational Guidelines), HMG/JICA/JOCV/CDFWCPII&GPCPII,(2000)。バージョン 1 から 5 まで作成されているが、すべてに、ここで引用した基本コンセプトが記載されている。

ばならないとの認識に立って、住民からのボトムアップによる取り組みを原則とする」と、明記されている。地域社会開発への参加の形態としては、住民による労働貢献が採用された。そこにおける参加者について明記はされていないが、次に述べる、ジェンダーと公正に関する基本コンセプトに沿って、女性や低カースト層（職業カースト：OC）などの不利な立場にいる人たちが含まれるようにする取り組みが、活動内容に含まれていた。

この案件では、社会・ジェンダーの視点を、プロジェクト目標達成の重要要素に位置づけている。事業評価ガイドラインの中では、上記の住民参加と同じように、基本コンセプトとして、ジェンダーと公正についての項目がある。具体的には「住民参加による総合的村落資源管理を適切に進めるためには、すべての住民が等しく平等な立場でこれに関与することが必要である。そのために、プロジェクトは貧困層、職業カースト、女性等、不利な立場にある者⁴⁶の受益と参加の公正さを高めるために、プロジェクトのすべての活動において、こうした公正が貫かれるよう、慎重かつ適切な配慮をおこなうこととし、これに反するいかなる活動も支援しない」旨が、明記されている。そこでは、「非優遇的な取り扱い」を受けている住民に対して能力向上のための特別プログラム（POWER⁴⁷）をおこなう旨も、明記されている。この案件では、不利な立場にある者（社会的弱者）には、女性だけではなく貧困

図 3-7 ネパール村落振興実施プロセス



出典：国際協力機構(2004)^f

層や職業カーストも含まれること、その背後にある不公正な社会構造が存在することを確認するために、「ジェンダーと社会公正（Gender and Equity）」、もしくは「社会ジェンダー」という表現を用いている。

（3）プロジェクトの活動内容

本案件は、ネパール中西部の中山間地域の貧困緩和と自然環境保全を上位目標に、住民参加型の村落資源管理モデルの開発を目指して実施された。

ワードを中心とするミクロレベルにおけるプロジェクトの主な活動や事業としては、村落住民の代表から構成されるワード保全委員会（Ward Conservation Committee, 以下 WCC）の設置、WCC

⁴⁶ Underprivileged people。プロジェクトでは、このような不利な立場にある人たちを総称で、社会的弱者（Disadvantage Group）とも呼んだ。国際協力機構(2004)^f

⁴⁷ POWER Program と呼ばれる。Poor people, Occupational caste and Women's Empowerment for Resource management Program の略。内容については、次項を参照のこと。

による村落開発計画の策定、その計画に添ったサブプロジェクトと呼ばれる地域社会開発事業の形成と実施などがあげられる。

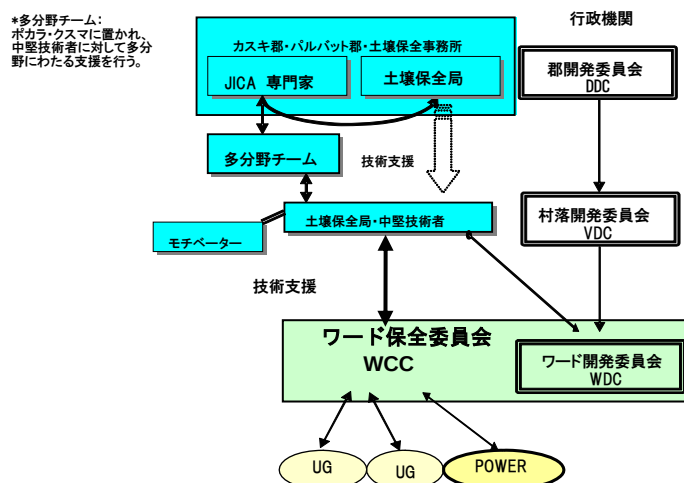
サブプロジェクトの実施は、サブプロジェクトごとに組織されたユーザーグループ（Users' Group 以下 UG）を通じて、WCC の監督のもとにおこなわれた。住民グループには、そのほかに、非識字女性によるパワーグループ（Poor people, Occupational caste and Women's Empowerment for Resource management, 以下 POWER）があった。実施プロセスは、図 3-7 の通りである。

ミクロレベルの活動は、プロジェクトによって雇用された、プロジェクトと地域住民の間に入って地域開発のファシリテーター役割をするモチベーター⁴⁸（Motivator, 以下 MOT）と、C/P 機関の土壤保全局の郡レベルの中堅技術者（Mid-level Technician, 以下 MLT）がチームになり、これらの住民の活動を支援した。MOT と MLT はワードごとに配置された。MOT はワードごとに、基本的に男女一人ずつ、二人が採用された。しかし、実際には、男性二人が採用された VDC もあった。MLT は、C/P 機関である DSCO の職員（フィールドスタッフ）である。DSCO が専門としている土壤保全に関する技術者であるが、住民参加型の村落開発をおこなうファシリテーターとしての専門性があつたわけではなかった。したがって、MOT と MLT は、プロジェクトの研修受講や、ミクロレベルでのプロジェクト活動の支援を通じて、ファシリテーターとしての技術を学んだ。この案件は、マオイストによる治安上の問題で、日本人専門家の村落部への訪問が制限されていたため、MOT や MLT が、メゾレベルの活動とミクロレベルの住民の活動を連携し、住民参加型の案件実施を側面から支援する上

での大きな役割を果たした。

メゾ・マクロレベルの活動としては、日本人専門家と C/P による事業実施ガイドラインの作成と改訂、日本人のジェンダー専門家による C/P や住民に対するジェンダー認識向上のための啓発活動、プロジェクトが開発した村落資源管理モデルの制度化のための取り組みや、他ドナーとの情報共有などがある。

図 3-8 ネパール村落振興の実施体制



出典：国際協力機構（2004）f, 国際協力事業団（2002）h,（2002）i,（2000）e,（1999）i を参考に作成

⁴⁸ 男女一人ずつ、各ワードより住民の代表としてプロジェクトに採用された。

1) ワード保全委員会 (WCC) の活動内容

プロジェクトは、まずワードごとに、既存の末端行政組織であったワード開発委員会⁴⁹ (Ward Development Committee、以下 WDC) のもとで、住民集会 (ワークショップ) を開催し、ワードレベルの村落資源保全を担当する委員会を結成した。これが、ワード保全委員会 (WCC) である。WCC は、WDC のメンバー全員 (ワード長、書記、会計など) の他に、POWER の代表 2 名、住民集会で実施された選挙で選ばれた村民 5 名、および UG の代表から構成された。(図 3-8 参照) この、住民集会で実施された選挙では、低カーストに属する住民を選ぶよう、プロジェクトから働きかけがあった。

WCC の結成後、WCC が中心となって、ワードごとの「流域管理見通し」が作成された。これは、ワードごとの開発のランドデザインとして将来像を描いたものであった。この「流域管理見通し」をもとに 3 年間の「村落資源管理計画 (CRMP)」と「年間活動計画 (AAP)」が作成された。これらの計画に基づいて、優先度の高いものから一年ごとに、サブプロジェクトと呼ばれる地域開発事業が実施された。事業運営ガイドラインでは、このサブプロジェクトは村落資源管理に直接的に関係するあらゆる事業を対象とすることになっている。ここで指す村落資源とは、「①森林、土地、水などの自然資源、②農地、家畜、インフラなどの人為的な資源、および③村落住民としての人的資源等、村落に存在し活用可能な全ての資源」である。プロジェクトは、上記の年間活動計画の内容に沿って、サブプロジェクト実施のための資金支援をおこなった。サブプロジェクトは、次に述べる UG や POWER といった住民グループによって実施されたが、WCC は、こうしたグループの活動やサブプロジェクトの実施全般にわたる支援と資金管理、簡単なメンテナンス、モニタリング・評価を担当した。

プロジェクトは、こうした WCC の活動がジェンダー視点に立っておこなわれるように、WCC メンバーにジェンダー認識向上のためのワークショップや、スタディツアーを実施した。スタディツアーでは、他の地域の女性グループの収入向上活動を視察し、女性の社会活動の有効性の認識の向上やジェンダーに基づく偏見の削減などに結びついた。また、POWER の女性代表 2 名が WCC のメンバーに加わったことで、WCC の男性メンバーが POWER を支援するようになったという事例もある。

WCC は、事業実施に関わる余剰金を貯蓄し運用することによる自己資金の運営をおこなっている。そのため、プロジェクトがフォローアップフェーズに入り、サブプロジェクトがすべて完了していた本評価調査時においても継続して事業の

⁴⁹ ワードごとの末端の行政機関。委員は、地域住民の代表として 5 名が住民選挙で選ばれる。選挙では、女性から一名、OC から一名選ぶことが規定されている。地方行政のしくみについては、図 3-8 を参照のこと。

運営がされていた。しかし、マオイストの影響により、2002 年より VDC や WDC の選挙がおこなわれておらず、WDC 委員の交代は滞ったままである。

2) サブプロジェクトの実施

WCC を中心に策定された「村落資源管理計画」と「年間活動計画」に沿って、サブプロジェクトと呼ばれる村落振興や資源管理のための地域開発事業が実施された。サブプロジェクトとしては、植林および防護フェンス事業、土砂災害防止事業、河川護岸事業、貯水池建設事業、歩道整備事業、簡易水道事業、水源地球整備事業、灌漑施設事業、歩道架橋事業、トイレ建設事業などが、ワードごとのニーズにより各ワードで約 10 件、組み合わせて実施された。実施にあたっては住民グループが組織され、そのグループと WCC によって実施された。住民グループは、各サブプロジェクトの受益者全員によって組織されるユーザーグループ (UG) と、不利な立場にある女性を対象に能力向上のための働きかけをおこないながらサブプロジェクトを実施するパワーグループ (POWER) の 2 種類が組織された。

① ユーザーグループ (UG) の活動内容

上記のように、UG はサブプロジェクトごとにそれぞれの受益者全員によって構成された。運営にあたっては、リーダー、会計、セクレタリーの 3 名からなる委員会が結成され、サブプロジェクトの実施を WCC とともに中心におこなった。しかし、委員会に女性が含まれることは稀であった。サブプロジェクトは、この委員会メンバーと WCC によって意思決定がなされた。UG の活動はサブプロジェクトへの資金もしくは労働提供である。これは義務化されていた。労働提供に対して、拘束時間によって借金が支払われた場合もあったが、借金の額は通常男女で異なっていた。

UG の活動はサブプロジェクトの実施のみであった。サブプロジェクトのメンテナンスが含まれていたが、簡易なものは WCC に任されていたため、サブプロジェクトが完了した UG は実質的には形骸化していた。

UG に対して、WCC に対しておこなわれたようなジェンダー認識向上のためのワークショップやスタディツアーなどの取り組みはおこなわれなかった。

② パワーグループ (POWER) の活動内容

3.3.1 の (1) で述べたように、この案件では、基本コンセプトにジェンダー視点に立った案件実施の必要性が含まれている。同時に、POWER と呼ばれる不利な立場にある女性を対象にしたグループ活動を通じた、社会的弱者への能力向上の取り組みがなされるよう規定されている。そのため、対象地域の各ワー

ドにおいて **POWER** が組織され、メンバーへの能力向上や地域社会開発事業の実施への参加がおこなわれた。

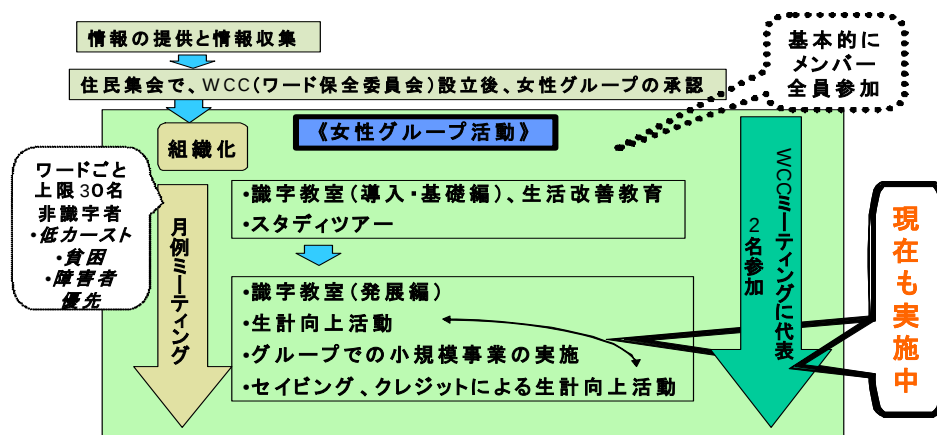
POWER は非識字女性を対象としており、障害者、**OC**、貧困者が優先的に加入するよう規定されていた。メンバーは5名以上30名以下とされており、ワード内のすべての非識字女性が加入したわけではなかった。また、一度メンバーが登録されると、新規メンバーの加入は禁止されていた。メンバーは、**WCC** が開催した住民集会において話し合いにより決定された。メンバーの中から議長、副議長、セクレタリー、会計といった委員会委員が、**POWER** の最初のミーティングにおいて決定された。この委員会によって **POWER** は運営されている。

POWER の活動内容は図 3-9 の通りである。グループが組織され、識字、生活改善、森林保全、ジェンダー認識向上といった分野の研修がメンバーの能力向上のために実施された。同時に、月例ミーティングも実施された。こうした能力向上のための取り組みの他に、他の地域の女性グループ活動の見学（スタディツアー）と、グループ内での積み立てとクレジット制度が設けられた。そして、それらの資金やプロジェクトからの補助金をもとに、グループ単位、もしくはメンバー個人によって生計向上事業がおこなわれた。クレジットの貸付は **OC** や貧困者が優先的に受けられるよう、プロジェクトから働きかけがあった。グループ運営は、グループ内の選挙で選ばれた委員会を中心におこなわれた。会計や議事録の作成など、非識字女性が組織運営をする上での障害は、識字教室のファシリテーター（教員）や **WCC** メンバーの支援によって改善された。また、研修を通じて、グループメンバー自身による組織運営が可能になってきている。

POWER の大きな特徴として、**WCC** への代表2名の加入がある。通常 **POWER** 委員会の委員が担う。**POWER** は非識字者かつ **OC** などの社会的に不利な状況にある女性が多く、委員会などに出席した経験のあるものはあまりいなかった。しかし、プロジェクトの制度として **WCC** に代表が2名加入したことで、**POWER** 参加者のモチベーションを高めたり、**POWER** の意見を地域社会開発事業に反映させるのに役立った。

現在、プロジェクトによる研修は終了したが、積み立て・クレジット制度と、生計向上活動が継続している。また、月例ミーティングも継続して実施されている。識字教室が終了した後も、識字ファシリテーターを例外的にメンバーとして受入れ、組織運営の強化を図っているグループは多い。また、**WCC** への **POWER** 代表者の出席も続いている。しかし、先に述べたように、マオイストの影響により **WCC** 活動が休止状態になっている地域もあることから、**WCC** の委員会自体がおこなわれなくなったために、出席が継続していない地区があった。

図 3-9 ネパール 女性グループ（power）の実施プロセス



出典：国際協力機構（2004）f と現地調査結果より作成

2) メゾ・マクロレベルの取り組み

プロジェクトでは、メゾ・マクロレベルでの取り組みとして、「事業実施ガイドライン」がプロジェクト実施期間中 5 回更新され、ジェンダー視点に立った内容になるような取り組みがなされた。また、ポカラのプロジェクト事務所で勤務している JICA 専門家や郡レベルの C/P 機関（DSCO）のスタッフへのジェンダー意識化のための研修、現地コンサルタントの委託調査による社会・ジェンダー（監査調査）⁵⁰などが実施された。前者は、案件関係者や対象地域住民へのジェンダー認識向上の研修やワークショップの実施である。後者は、ジェンダー分野の専門家と DSCO の副所長の指示のもと、モチベーターと MLT がジェンダーに関する村落調査をおこなった。

中央省庁などを対象とするマクロレベルの活動としては、ジェンダー専門家が C/P 機関であるカトマンズの森林土壌保全省内に作成されたドナー間のネットワーク⁵¹に参加し、社会・ジェンダーオーディットなどの情報を共有した。また、DSCO 本部におけるワークショップなどで、ジェンダー視点に立った取り組みを含めたプロジェクト活動成果の情報共有化や普及に勤めた⁵²。

⁵⁰ Gender and Social Diversity Audit。第 2 フェーズにおけるジェンダー分野の活動の、評価・モニタリング及びアプローチのまとめを目的に実施された。

⁵¹ Gender and Equity Working Group: GEWG 杉山(2004)

⁵² 現地調査インタビューより

3.3.2. 対象地域の概要

本評価の対象地域の地理的概況と社会経済の概況は、以下のとおりである。

(1) 地理的概況

カスキ郡プムディブムディ村（VDC）（以下プムディブムディ）は、カスキ郡の郡庁所在地であるポカラに隣接する村である。今回評価対象となったワード1とワード6は、ポカラからの直線距離は約4kmであり、実質的にポカラに隣接している。盆地であるポカラを出ると中山間地となっており、村のほぼ中央をシャンジャ郡に通じる幹線道路が通っている。幹線道路には頻繁にバスが通っているが、村内は山道であり徒歩での移動になる。ワード内は、トール（Tole）と呼ばれる自然村の集落に分かれている。各トール間は山あいの地理に分断されており、相互のアクセスが悪いことが多い。

プロジェクトは、カスキ郡とパルバット郡の合計10村（VDC）を対象としているが、カスキ郡で最も遠方の村であるシッダ村は、ポカラから3時間ほど幹線道路沿いにバスで移動した後、さらに村の中央まで徒歩で2時間ほどかかる。パ

図3-10 プムディブムディ村ワード6の地図



出典:モチベーターが研修において作成(2004年10月)

図3-11 プムディブムディ村ワード1の地図



出典:プロジェクト参加者により調査団用に作成(2004年10月)

ルバット郡で一番遠方のリミタナ村は、ポカラから 4 時間ほど幹線道路沿いにバスで移動した後、さらに村の中央まで徒歩で 1 時間ほどかかる。しかし、雨季は橋がないため、ポカラからバスで 3 時間行ったあと 4 時間徒歩で行くこととなる。それぞれの地域のユーザーグループや POWER メンバーの家は、村の中央からさらに徒歩での移動となる。本評価調査では、プムディブムディ村の二つのワードを対象としているが、プムディブムディ村はプロジェクト事務所のあるポカラからは一番近い村である。

(2) 社会経済状況

プムディブムディの人口は 8,967 人、1,616 世帯（うち女性世帯は 239 世帯、14.7%）で構成されている。同村は 9 ワードに分かれており、本評価では、ワード 1 とワード 6 を対象にした。ネパールの行政制度は図 3-8 の右側にあるとおりである。すなわち、カスキ郡の郡開発委員会（District Development Committee : DDC）の下に、プムディブムディ村の VDC が設置されている。この VDC には 9 ワードあり、それぞれのワードに WDC が設置されており、これがワードレベルにある末端の行政機関になっている。それぞれのワードのカースト構成は表 3-10 のとおりである。主要言語はネパール語であるが、非識字率は高いと言われている⁵³。

表 3-10 プムディブムディ村及びワード 1 とワード 6 の社会状況

事業対象地域	プムディブムディ村	ワード 1	ワード 6
人口(2004 年)	8967 人 (男性 4555、女性 4412)	1254 人 (男性 622、女性 632)	1034 人 (男性 546、女性 488)
世帯数(2004 年)	1616 (うち女性世帯主 239)	217 (うち女性世帯主 18)	180 (うち女性世帯主 35)
カースト	ブラーミン 48% チェトリ 4% グルン 21% 職業カースト 20% その他 7%	ブラーミン 54% グルン 29% 職業カースト 9% チェトリ 5% その他 3%	ブラーミン 15%、 グルン 58% 職業カースト 27%

(出典:プロジェクトデータベースより作成)

プムディブムディの主な生業は農業である。しかし、カーストにより土地の所有が制限されている。例えば、ブラーミンは自らの農地を持つ一方、職業カースト（OC）は概して農地を持つことがない。ブラーミンは、日雇いで OC に農作業をさせることが多い。OC はこうした日雇いの農作業の他に、特定の職業（鍛冶屋、仕立て屋、大工など）により収入を得ている。プムディブムディは、ネ

⁵³ 本調査では、マオイストの攻撃によって VDC 事務所が閉鎖されていたため、プムディブムディにおける識字率を入手できなかったが、ネパール全体の成人識字率は、2002 年は 44%であった。UNDP(2004) また、調査団によるキーインフォーマントへのインタビューでも、繰り返し成人識字率の低さが強調されていた。

パール中西部の中心地であるボカラ市に隣接しているため、ボカラ市に通勤している者もいる。多くが山岳民族であったグルンは、インド・イギリス軍に従事したり、海外出稼ぎが多いため経済的には比較的裕福であり、女性の社会進出にも比較的寛容である⁵⁴。一方、社会的に最下位に位置づけられており、貧困層であった職業カーストにおいても、近年中近東などの海外への出稼ぎ者が増え、経済水準が上がってきている⁵⁵。

今回評価対象としたプムディブムディにおいては、ネパールの他の地域でも一般的に見られるようなカーストとジェンダーによる複層的な階層構造が存在する。例えば、カーストによって就業の制限があり、低カーストへの蔑視の慣習が強く、触らない、共に食事をしない、高位カーストの家の台所には入れないなど、一緒に社会活動をおこなうには制限があった。また、男女の固定的な性別役割分業により男女でも就業の制限があり、OC 以外の女性が外で日雇いなどの賃金労働をすることはあまり好まれない。また、集会への参加などの社会活動は主に男性がおこなうというのが慣習であった。就学も、女子は嫁に行くだけで必要がないとされ、男子が優先される傾向があった。他方、家事や子育ては女性の仕事とされ、特に、時間もかかり重労働である水汲みや薪集めは女性の役割と考えられていた。世帯収入は通常男性が管理する。子ども（特に息子）ができないと他の女性と結婚しても良いなどの慣習があるため、一夫多妻のことも多い。村では飲酒をした夫から妻への暴力も多く、男性優位の社会構造がみられる。

プムディブムディにおいては、海外援助機関や国際 NGO による開発支援が多い。そうした支援は、住民の組織化を通じておこなわれることが多く、グループが乱立しており、一人の住民が複数のグループに所属することも珍しくない。しかし、支援が終わると形骸化しているグループが多くみられた。他に、女性グループとして「アマサムハ」といわれる母親グループが存在し、活動を展開している。アマサムハは、通常トールごとに母親達によって形成されていることが多い。祠（マンディル）を作ったり、歩道を直すなどの宗教的な徳を積む活動をしたり、葬式や結婚式などといった人の集まる場所に出向き、踊りや歌を披露することで資金を得、自分達のニーズに沿った小規模な事業を実施している。事業は小学校の補修や、水道の整備など、家事や家族への支援となるものが中心である。女性の女性自身による自主的な活動の経験を積む機会となっており、女性リーダーを輩出している。本評価で対象としたプムディブムディのワード 1 とワード 6 の POWER グループの主要なメンバーには、アマサムハのリーダーも兼務している女性が含まれていた。

⁵⁴ 現地調査によるキーインフォーマントインタビュー結果より

⁵⁵ 同上

最近のプムディブムディにおける政治的な動向として、反政府勢力であるマオイストの活動があげられる。マオイストの攻撃のために、村レベルでの行政は停滞している。例えば、郡や村レベル、ワードレベルの選挙が 2 年前より実施されておらず、村長やワード長、その他の役職は空席となっている。また、地方政府に対して強制的な事務所封鎖がおこなわれている。調査団訪問時にもプムディブムディの VDC 事務所は閉鎖されていた。

3.3.3. プロジェクト活動により生じた地域社会の変化

ここでは、現地調査による調査結果をもとに、プロジェクトによって生じた変化をジェンダー視点から検討する。変化の主体を明確にし、ジェンダー視点から分析を可能にするために、個人、世帯、コミュニティレベルに分けて記載する。この項では、本評価調査対象地域であるプムディブムディ村のワード 1 とワード 6 だけでなく、それ以外の 9 村（VDC）のモチベーターへのインタビュー結果もあわせて考察の対象とする。

（1）個人レベルの変化

プムディブムディワード 1 とワード 6 において、ネパール村落振興プロジェクト（案件）により生じたと思われる女性個人レベルでの変化は、主に女性による POWER グループの活動への参加と、WCC に対するジェンダー視点に立ったプロジェクトの働きかけによって生じたと考えられる。例えば、POWER で研修を通じて得た知識によって女性が自信を獲得したり、グループ活動の喜びを知るといった意識的变化が見られた。また女性が研修で得た知識を活用したことにより、生活の向上、貯蓄とセイビング、生計向上活動を通じた経済的变化もみられた。同時に、POWER の活動を通じて女性が公的場所へ参加することが可能になる等の社会的文化的変化もみられた。表 3-11 は、こうした POWER グループ活動による女性の個人レベルの変化を示したものである。

表 3-11 プムディブムディにおける POWER グループ活動による
個人レベルの変化 （女性）

プラスの変化	
《意識的变化》	
☺ 識字教室に参加して、読み書きができるようになった。また自信を持って外出したり、ミーティングに参加できるようになった。	(POWER メンバー ワード 6 50 代 0C)
☺ 以前はサインができず、自分だけ押印をして恥ずかしかったが、識字教室に参加したために今はサインができるようになってうれしい。公衆衛生やトイレについても以前は知らなかった。今は知っていることに誇りを持っている。	(POWER メンバー ワード 6 41 歳)

◎ POWER のメンバーになって、グループの皆で喜びや悲しみを分かち合えるようになった。

(POWER メンバー ワード 6 50 代 0C)

◎ POWER と WCC におけるジェンダー認識向上の研修やスタディツアーに参加して、男女で差別をしてはいけないことや、男女の格差は是正しなければいけないことがわかった。

(POWER メンバー ワード 1 30 代 0C)

《経済的变化》

◎ POWER で貯蓄をするようになって、小額のお金でも貯めることで運用できるとわかった。

(POWER メンバー ワード 6 50 代)

◎ PPWER からクレジットを借りて山羊飼育をおこない、利益を得た。

(POWER メンバー ワード 6 41 歳)

《社会的文化的変化》

◎ 読み書きができるようになって紙幣の違いがわかるようになり、紙幣が使えるようになった。

(POWER メンバー ワード 6 60 代)

◎ 公衆衛生やトイレについて知ることができた。

(POWER メンバー ワード 6 50 代 0C)

◎ POWER の研修旅行で、今まで考えたこともなかったものを見ることができた。

(POWER メンバー ワード 6 60 代)

◎ POWER に参加して、こうしたプロジェクトの事務所にも来られるようになった。

(POWER メンバー ワード 6 60 代)

マイナスの変化

◎ POWER を途中で脱退した女性で、落ちこぼれ感を感じている人がいる

(POWER メンバー ワード 1 30 代 0C)

◎ POWER の活動に参加するために家事を急いでこなさなければならない。時間的拘束が大変に感じる時がある。

(POWER メンバー ワード 1 50 代)

◎ POWER へ参加することを夫に反対され、夫から暴力を受けるようになったメンバーがいる。

(リミタナ村 MOT 20 代男性)

一方、男性の変化については、WCC への支援を通じた、ジェンダー認識向上のための研修の実施やその他の取り組みによるものがある。例えば、ジェンダー研修を受けてから妻の外出に対して寛容になった例などである。しかし、WCC メンバーの人数は限られていたため、村落全体の男性の変化は限定的であった。また、多くの男性は UG 事業に参加したが、これらの UG 事業ではジェンダー視点に立った取り組みがほとんどおこなわれなかった。そのため、UG がおこなったサブプロジェクトによる直接的な便益の享受以外にあまり変化がみられなかった。

(2) 世帯レベルの変化

世帯レベルでは、女性が POWER を通じて変化したことによる間接的な影響により、夫婦関係や夫の態度が変化する事例が多く見られた（表 3-12 参照）。

表 3-12 プムディブムディにおける POWER グループ活動による
世帯レベルの変化

プラスの変化	
《意識的变化》	
◎ 以前、夫は地域の問題などを自分には理解できないと思い、情報の共有などをしてくれなかった。POWER でさまざまな活動をしている自分をみて、自分を評価するようになった。	(POWER メンバー ワード 1 36 歳)
《経済的变化》	
◎ 妻が POWER において生計向上活動を始めたことで、世帯収入が増加した	(POWER メンバー ワード 6 50 代)
《社会文化的变化》	
◎ POWER の活動に参加するために、夫が家事を分担してくれるようになった。	(POWER メンバー ワード 6 42 歳 0C)
◎ 識字教室に参加して、海外に出稼ぎ中の夫と文通をするようになった。今まで夫は家の外の話はしてくれなかったが、文通ができるようになり、地域の問題などを相談するようになった。	(POWER メンバー ワード 6 38 歳 0C)
マイナスの変化	
◎ POWER でカースト差別やジェンダー差別がいけないことを学んだ。POWER のミーティングでは実践しているが、家に戻ると、0C への態度を変えられない。	(POWER メンバー ワード 1 50 代)
◎ 妻が POWER に参加することで、夫が家事をしなければならないことを不満に思っている。暴力をふるうようになった夫もいる。	(リミタナ村 MOT 20 代男性)

POWER グループの活動に女性が参加することにより生じた上記のような世帯レベルの変化の他に、夫が WCC のメンバーであり、WCC に向けておこなわれたジェンダー認識向上の取り組みにより、夫の妻に対する考えや態度が変化した事例があることが見られた。

(3) コミュニティレベルの変化

プロジェクトは、コミュニティの意思決定をおこなう機関である WCC の委員メンバーに対して、ジェンダー視点に立った働きかけをおこなった。また、WCC には POWER の女性代表が 2 名加入している。そのため、WCC への働きかけや、前述のような POWER 活動を通じた女性への働きかけによって、WCC の内部に変化が生じた例がみられた。また、POWER の活動に触発され、POWER のメンバー以外の女性グループが WCC に働きかけ、地域社会開発事業をおこなった事

例があった。一方で、POWER の参加者が限定的であったことや、プロジェクトの取り組みが限定的であったことから、地域内でさまざまな格差が生じた例もみられる（表 3-13 参照）。

表 3-13 プムディブムディにおける POWER グループ活動による
コミュニティレベルの変化

プラスの変化	
《意識的变化》	
◎ WCC は、POWER の活動を自分達の地域の活動として支援してくれている。	(POWER メンバー ワード 1 30 代)
《経済的变化》	
◎ POWER が WCC にはたらきかけて水事業を主体的に実施した。特に、POWER メンバーが労働貢献に励んだおかげで、プロジェクトにより供与された予算よりかなり小額で事業が完成した。	(リミタナ村 MOT 20 代男性)
《社会文化的变化》	
◎ POWER が実施されてメンバー間での OC への差別や偏見がなくなり、一緒に座ったり食事を取ったりできるようになった。	(POWER メンバー ワード 1 30 代)
◎ WCC のメンバーとして POWER の代表が参加したことで、POWER メンバーの意思が WCC に届けられ、ニーズに沿った事業実施が実現した。	(リミタナ村 MOT 20 代男性)
◎ POWER に触発された POWER メンバー以外の女性たちが、WCC に働きかけて事業を積極的に実施した。	(プムディブムディ村 MOT 20 代女性)
マイナスの変化	
◎ 少しだけ就学経験があっても実際には読み書きができない女性は POWER に参加する資格がなかったのも、自分達参加者との格差を感じている。	(POWER メンバー ワード 1 40 代)
◎ 識字教室を開催する場所の都合で、POWER の参加者の地域が偏っている。	(POWER メンバー ワード 6 42 歳 OC)
◎ POWER がジェンダー平等のための取り組みをおこなっていることに、反対している男性がいる。	(シッダ村 MOT 20 代男性)

3.3.4. 調査結果のエンパワーメントの視点からの分析

プロジェクトの働きかけによって、個人・世帯・コミュニティのそれぞれのレベルにおいて変化が見られたが、ここでは、さらにエンパワーメントの視点から変化を分析する。この項でも、本評価調査対象地域であるプムディブムディ村のワード 1 とワード 6 だけでなく、それ以外の 9 村のモチベーターへのインタビュー結果もあわせて考察した。

3.1.2 で確認したとおり、本評価で述べる個人的エンパワーメントとは、プロ

プロジェクトによって生じた個人の変化が自分自身を変革し、周囲との関係性の変革を引き起こすための意識的、経済的、社会的文化的な力を得たことを指す。また、世帯レベルのエンパワーメントとは、プロジェクトによって生じた個人の変化もしくはエンパワーメントが、世帯内の関係やジェンダー関係を変革した場合を指す。同時に、世帯レベルの変化によって夫婦の関係性が変化した場合も、世帯レベルのエンパワーメントに含む。コミュニティのエンパワーメントとは、プロジェクトによって生じた個人もしくは世帯レベルの変化によって、地域社会の階層構造やジェンダー関係が変化した場合を指す。また、プロジェクトなど外部からの直接的な働きかけによりコミュニティの階層構造やジェンダー関係が変化した場合も、ここに含まれることとする。

（１）個人レベルのエンパワーメント

表 3-11 で述べたように、プムディブムディにおける女性個人レベルの変化は主に POWER グループ活動によって生じた。ここでは、こうした個人の変化が個人のエンパワーメントに結びついた事例を紹介しつつ、プロジェクト活動と個人のエンパワーメントの関係を分析する。

POWER に参加したことにより生じたと考えられる個人レベルのエンパワーメントとしては、研修を通じて知識を得たことによる意識的、社会文化的側面からのエンパワーメントと、貯蓄とクレジット制度と組み合わせた生計向上活動による経済的エンパワーメントの事例が見られた（BOX3-20）。

BOX3-20 POWER グループの活動を通じてエンパワーメントされた女性の事例 （女性個人のエンパワーメントの事例１ ネパール）

POWER に参加し研修を受けたことで、プレゼンテーションの仕方を学び、意見を言えるようになった。また、夫が家の外でのでき事の話をしていても「自分もできる」と思えるようになった。また、クレジットを借りることでローンをするという考えを学び、必要な時にお金を活用できるようになった。こうして、以前は開発事業に全然参加することがなかったが、今はいろいろ参加している。

（POWER メンバー ワード 6 32 歳 00）

POWER は、研修による能力向上と、貯蓄とクレジットを組み合わせた生計向上活動への支援のように、複合的支援を組み合わせたプログラムであった。そのため、この BOX3-20 の事例のように、複数のエンパワーメントが生じる事例が多く見られた。これは、前項の図 3-6 で見られたような意識的側面、経済的側面、社会的側面が重なり合い、相乗効果をもたらしている。

また POWER では、メンバーの能力向上や生計向上のための取り組みのほか、意思決定への参加促進をおこなっている。すなわち、WCC への POWER の

代表 2 名の参加である。上記の個人のエンパワーメントと結びついて、意思決定への参加という社会的側面からのエンパワーメントが見られた事例が BOX3-21 である。

**BOX3-21 WCC(意思決定機関)参加を通じたPOWERメンバーのエンパワーメントの事例
(女性個人のエンパワーメントの事例2 ネパール)**

自分の村(サルコラ村)のワード1のPOWERメンバーは10人で、7人はOCだ。代表としてWCCに出席している2名もOCだ。当初OCであり且つWCCのような委員会に男性に混じって出席したことがなかったPOWERの代表2名は、WCCの会議に出席しても何も発言できなかった。POWERの活動を通じて、女性達は自信を持つようになり、またWCCの会議への出席にも慣れ、今は変化の段階にある。少しずつPOWERからの意見を言えるようになってきている。これはPOWERによる変化だ。

(サルコラ村 MOT 30代男性)

また、BOX3-22のように、ジェンダー研修の実施により、女性たちの間に自らジェンダー状況を改善する意識(ジェンダー平等の認識)の発生がみられた事例がある。

**BOX3-22 POWERの研修を通じてジェンダー平等の必要性を認識した女性の事例
(女性個人のエンパワーメントの事例3 ネパール)**

POWERの活動においてジェンダー研修を受けるまでは、夫が意思決定をおこない、妻が従うという状況を受け入れていた。地域の開発事業においても、夫が会議などに参加するため、夫が話してくれた場合にのみ、自分の意見やニーズを伝えてきた。

POWERの研修を受けて、ジェンダーで差別をしてはいけないと学んだ。自分の子どもにも、男女で差別せず、女の子にも男の子と同じだけの教育を受けさせようと思う。

(POWERメンバー ワード1 30代OC)

こうした、POWERグループの活動による女性個人のエンパワーメントがみられる一方、男性個人のエンパワーメントは限られていた。

この案件への男性の参加は、受益者としてのUGへの参加と、一部の選ばれたもののWCCへの参加であった。前者を通じて、サブプロジェクトによって便益を受けたことによる変化が見られた。しかし、UGに対して、ジェンダー視点に立った取り組みはおこなわれておらず、階層構造や周囲との関係性を変革に繋がるような男性個人エンパワーメントの事例は、本評価調査では得られなかった(BOX3-23参照)。

**BOX3-23 ユーザーグループ（UG）参加男性が変化しなかった事例
（男性個人のマイナスのエンパワーメントの事例 ネパール）**

男性参加者の殆どは、ジェンダーについての認識や考え方は変わってないと思う。妻が POWER に参加したことで間接的に影響を受けて変わった事例はあったが、男性参加者の殆どが加入していた UG に対して、プロジェクトは何もおこなわなかったからだ。プロジェクトは、POWER にしたようなジェンダー認識向上ための取り組みを何かすれば、男性も変わったと思う。

（MLT プムディブムディ 28 歳 男性）

一方、BOX3-24 のように、WCC メンバーとしてジェンダー認識向上の研修やスタディツアーへの参加を通じて変化した事例が見られた。しかし、WCC のメンバーは約 10 名のため、対象地域の住民の中でこうした変化がみられた事例は限られていた。

**BOX3-24 研修を受けてジェンダーに関する考えが変化した男性の事例
（男性個人のエンパワーメントの事例 ネパール）**

自分の夫（WCC のセクレタリー）は、ジェンダー認識向上の研修を受けて以来、非常に変わったと思う。自分が外出するのを許可してくれるようになった。また、POWER の活動を助けてくれるようになった。今でもミーティングの議事録を取ったり、会計の面倒をみている。

（POWER メンバー ワード 1 36 歳）

（２）世帯レベルのエンパワーメント

プロジェクトによって生じた世帯レベルのエンパワーメントは、前項で述べたような、POWER や WCC の活動を通じた個人のエンパワーメントによって、世帯内のジェンダー関係の変化が変化して生じた事例がみられた。

例えば、POWER グループへの参加による女性のエンパワーメントの波及効果として、世帯レベルのエンパワーメントが引き起こされた事例としては、下の BOX3-25 のようなものがあつた。この事例では、識字教室への参加を通じて妻の能力が向上し、それによって夫が妻への認識を改めた。それにより夫婦間の関係性が変化し、世帯レベルでエンパワーメントが生じた事例である。こうした夫婦の関係性が変化した事例は、POWER の活動の一環である生計向上活動により世帯の収入が向上した場合にも見られた。

**BOX3-25 妻の POWER の識字教室によって夫婦の会話に変化した事例
（世帯のエンパワーメントの事例 1 ネパール）**

自分は非識字者だったので、夫は自分の能力を評価していなかった。しかし、POWER に参加して識字教室に通って読み書きができるようになり、出稼ぎ中の夫と文通することができるようになった。夫は、自分が研修によって本当に読み書きができる

ようになったことに驚き、POWER の活動を認めるようになった。文通を通じて、夫は自分の社会活動能力を認めるようになり、地域社会の問題や仕事上の問題についても手紙で相談しあうようになった。

(POWER メンバー ワード 6 38 歳 OC)

また BOX3-26 のように、妻の POWER グループ活動への参加のために、家事の一部を夫が分担するようになった事例がある。

**BOX3-26 妻の POWER 活動を支援するため夫が家事を分担するようになった事例
(世帯のエンパワーメントの事例 2 ネパール)**

今日も POWER の集まり（評価調査のためのグループディスカッション）のためポカラに来るために、夫が家の掃除をしてくれている。これがプロジェクトによる変化なのだと思う。でも、自分が POWER の活動で忙しくしていることに家族は大変ハッピーだと言ってくれている。自分達の変化を見ているから、夫はハッピーだと言ってくれるのだと思う。

(POWER メンバー ワード 6 42 歳)

一方で、妻がプロジェクト活動に参加したことにより夫が家事の分担や妻の不在を不快に思い、妻に暴力をふるったり妻の参加を阻止した事例がある。以下の BOX3-27 の事例は、プムディブムディの事例ではないが、他の地域の MOT へのインタビューによって抽出された。

**BOX3-27 POWER 参加のため夫の夫婦間暴力が発生した事例
(世帯のマイナスのエンパワーメント事例 1 ネパール)**

リミタナ村のワード 3 は、OC 人口が非常に高く、POWER メンバーの多くは OC だ。OC は農地もなく肉体労働で疲れているため、世帯内で夫が飲酒で暴力をふるう家が多い。また非識字者も多く、妻の識字の重要性を理解しない夫が多い。

POWER の識字教室は夜におこなわれるため、メンバーは毎晩のように家を空けなければならない。しかし、夫が妻の夜の外出を不快に思ったり、毎晩遊んでいるのではないかと怪しむことで、夫からの暴力が激しくなったメンバーがいた。そのうちの何名かは耐えられず、結局途中で POWER を脱退してしまった。

(リミタナ村 MOT 男性 20 代)

また、プロジェクト活動を通じて個人のエンパワーメントが生じたにも関わらず、世帯レベルでは実現できなかった事例もみられた。ネパールはカースト差別が強く、評価調査対象地であるプムディブムディも例外ではなかった。そのため、OC と高位カースト者は同じミーティングに参加したり食事を共にしたりすることができなかった。BOX3-28 は、POWER メンバーは POWER の活動を通じてこうした OC への偏見を解消したが、世帯内では夫や家族の手前、それが実現できないという事例である。

**BOX3-28 ジェンダーに関する考えの変化を世帯内では実現できない事例
(世帯のマイナスのエンパワメントの事例2 ネパール)**

自分はブラミン（高カースト）であるため、以前はOCと同じ部屋と一緒に会議に参加したり、食事をするなど考えられなかった。しかし、POWERの活動を通じて、OCへの差別は良くないとわかった。今は、POWERではこうして一緒に活動をしている。しかし家の近くまでくると、以前のようにOC触れないように気をつけたり、触れたらすぐ手を洗うようにしている。自分の中では偏見はもうないが、夫や姑の手前、それをしなければならぬ。POWERでできることも家で実現するのは難しい。
(POWERメンバー ワード1 50代)

この事例では、POWERのメンバーの中ではOCへの変化を実現できており、コミュニティレベルでの社会関係の変化（コミュニティレベルのエンパワメント）が生じているにもかかわらず、世帯レベルでは実現に至っていないという事例にもなっている。コミュニティレベルのエンパワメントについては次に述べる。

(3) コミュニティレベルのエンパワメント

本件におけるコミュニティレベルの変化は、ジェンダー視点に立った取り組みを受けた本人の働きかけによるもの、コミュニティレベルであるWCCへのジェンダー視点に立った取り組みの直接的影響であるものの2種類が見られた。

BOX3-29は、POWERグループ活動を通じたエンパワメントによりPOWERメンバーがコミュニティに働きかけをおこない、コミュニティに実際に変化をもたらした事例である。

**BOX3-29 POWERメンバーの働きかけにより事業が実施された事例
(コミュニティレベルのエンパワメントの事例1 ネパール)**

リミタナ村のワード4のWCCの会合に出席しているPOWERの代表メンバーは、とても活発だ。POWERの活動を通じて、社会活動参加への自信や能力を身につけ、次第にWCCの会議でも発言をするようになってきた。水道建設事業においては、水道を利用するのは主に女性であるため、POWERメンバーは女性たちのニーズが反映される必要があると考えるようになった。そのため、POWERメンバーは、WCCに働きかけて、計画段階から意思を表明した。

実際に実施された水道建設事業では、POWERのメンバーのニーズが反映されたものになった。また、実施段階でもPOWERメンバーの女性たちが中心になって労働貢献などを通じて参加をしたことで、事業が迅速且つ効果的に実施された。

(リミタナ村 MOT 男性 20代)

このように、POWER活動を通じて生じた個人のエンパワメントを通じ、女性たちがグループとして連帯し、かつ意思表示をしたことにより、コミュニティレベルのエンパワメントに発展した。このような場合には、グアテマラの事

例と同様にグループのリーダーの存在が大きく作用する。POWER の場合は、POWER 委員会の委員長やセクレタリーがリーダーとしてグループをエンパワメントに導く役割を果たした。同時にこの案件では、ミクロレベルの活動の促進のため、モチベーター（MOT）と呼ばれる住民男女が、プロジェクトに雇用され配置されている。こうしたモチベーター（MOT）も、リーダーとしての役割を果たしている。

BOX3-30 は、POWER 活動を通じて女性リーダーがエンパワメントされ、コミュニティの活動へ働きかけを起こし始めた事例である。

**BOX3-30 女性リーダーを通じて POWER と地域社会の関係が変化した事例
（コミュニティレベルのエンパワメントの事例 2 ネパール）**

シッダ村のワード 5 の POWER の委員長と会計役は、とてもアクティブだ。二人は WCC への POWER の代表にもなっている。もともと二人はアマサムハのメンバーで、とても活動的だった。そして、POWER の活動を通じてさらに能力が向上し、意識的变化も生じている。

他のワードでは、POWER の活動の会計や議事録作りを WCC に助けてもらっている所も多いのだが、ここでは、リーダー達の主導ですべて自分達でおこなっている。リーダー達は、スタディツアーやモチベーターによる働きかけに触発されて、コミュニティ全体についてもっと知りたいと思うようになってきた。そのため、モチベーターである自分に、POWER やプロジェクト全体の資金がどこからどのように支出されているのか、質問してくるようになった。また、グループを正式に政府に登録したいと、レジストレーションの方法について質問してきたこともある。

さらに、WCC でも活動的になってきた。以前は WCC では意見が言えなかったのだが、今は POWER の代表としての意見を言えるようになってきている。

（MOT シッダ村 27 歳男性）

この事例のように、POWER を通じたエンパワメントは、MLT やモチベーター（MOT）によっても促進された。さらに、モチベーター（MOT）自身がプロジェクト活動によってエンパワメントされたことで、POWER のエンパワメントがさらに促進された。例えば BOX3-31 は、女性モチベーター（MOT）が、自分自身のエンパワメントと女性のモチベーター（MOT）の有効性を語っている。こうした話は、プロジェクトによるジェンダー認識向上の研修により得た知識を活用している側面もあると思われる。しかし、地域女性でもあるモチベーター（MOT）のエンパワメントが、コミュニティのエンパワメントに繋がった顕著な事例である。この案件では、同様な役割を識字教室のファシリテーターが担っている地域もみられた。

**BOX3-31 モチベーター（MOT）のエンパワーメントの事例
（コミュニティレベルのエンパワーメントの事例3 ネパール）**

女性のモチベーターはとても重要だと思う。自分は、プロジェクトに採用される前は普通の学生だった。NGOの資金による識字教室の先生もやっていたが、前は、多くの人前で話したり年上の男性に話しかけたりはできなかった。自分は、地域の女性の一人としても、大変エンパワーメントされたと思う。そして、同じ地域の女性である自分が、他の女性達に対して自分のように社会活動をおこなったり、地域社会に働きかけできるよう促進することは、コミュニケーションも良くなり、とても効果的だと思う。

特定の事情により女性のモチベーターがいない村があるが、その地域の女性達はかわいそうだと思う。女性のモチベーターに対しては女性達はフリーに話ができるし、エンパワーされた女性のモデルとして皆が目標にすることができる。

（プムディブムディ村 MOT 20代女性）

このような、POWERの活動を通じた女性のエンパワーメントによるコミュニティレベルのエンパワーメントの他に、プロジェクトによるWCCへの働きかけによってエンパワーメントが生じた事例もみられた。

プロジェクトは、WCCに対してジェンダー認識向上のための研修やスタディツアーを実施した。また、POWERの代表メンバーをWCCに加入させることで、社会的弱者である女性の意見がワードレベルの意思決定に反映されるように取り組んだ。BOX3-32は、WCCへのプロジェクトの働きかけのためにWCCの男性メンバーがジェンダーに関する考えを変化させ、コミュニティレベルのジェンダー関係が変化した事例である。

**BOX3-32 研修によりWCC男性メンバーがジェンダーに関する考えを変化させた事例
（コミュニティレベルのエンパワーメントの事例4 ネパール）**

自分のワードのWCCの中心的存在の男性メンバー2人（会計とセクレタリー）は、ジェンダー視点に立った取り組みの重要性を軽視し、女性グループ活動に否定的だった。そして、WCCのミーティングにおいてもPOWERメンバーの出席や発言を妨害した。例えば、女性が出席しにくい時間に会議を設定したり、会議中も意見を聞かず存在を軽視するような態度をしていた。

しかし、スタディツアーにおいて他の地域のOG女性の生計向上グループの経済的成功を見て、女性の経済活動の効果に触発された。ツアー終了後、自分のワードのPOWERの生計向上活動の支援のために豚の仕入れを手伝うようになった。

（MOT トウムキ 30代男性）

しかし、これまでのべてきたようなコミュニティレベルのエンパワーメントが生じた事例は、プロジェクトが対象とした地域やプロジェクト活動によって生じた変化の中での一部に限られていた。例えばBOX3-33のように、個人のPOWERを通じたエンパワーメントやプロジェクトによるWCCへの研修やスタディツアーを通じた働きかけが、コミュニティレベルのエンパワーメントに結びついていない事例も多くみられた。

**BOX3-33 女性の WCC（意思決定機関）での意思の反映の限界の事例
（コミュニティレベルのマイナスのエンパワーメントの事例 ネパール）**

自分達の代表が WCC に入っているが、自分達はそれほど意思決定に参加していない。男性は女性に責任を与えてくれない。WCC の意思決定はいつも男性の中で議論をして、男性間で合意をしたあと女性に合意を求めてくるだけだ。女性が自分で意思決定をできるのは女性だけの母親グループだけで、プロジェクトでの活動ではない。

プロジェクトはいつも男性経由で事務的な合意を締結し、その後、自分達女性の所に話が来る。だから、男性は自分達ができないと思っている。ジェンダー認識向上研修を受けても、WCC の男性メンバーたちは変わらなかった。

自分達にも責任を与えてくれ、一度できることを証明できたら、男性たちももっと自分達に責任を与えてくれるだろう。もしくは、事務的な合意を自分達女性経由でおこなってくれたら、自分達も意思決定に参加できるだろう。

（POWER メンバー ワード 1 32 歳 OC）

この事例では、WCC の会議において未だに POWER メンバーや女性の意思が反映されないことにより、男性の意思だけが反映された地域社会開発が進み、結果としてジェンダー格差が拡大している傾向があると思われる（ただし、今回の調査ではそうした事例は抽出できなかった。）。そのため本評価では、こういったエンパワーメントが生じない事例はマイナスのエンパワーメントと判断した。

このようなマイナスのエンパワーメントを発生している原因を分析した。そこで、グアテマラの事例研究と同じようにプロジェクトの取り組みが一部の住民に偏ってしまう原因として、地域社会のジェンダー状況とプロジェクトのジェンダー視点に立った取り組みの偏りが浮かび上がった。以下に、参加者と非参加者の存在、参加者のジェンダー状況の違い、女性のみに対象が限られたジェンダー視点に立った取り組みの限界の、3 点にまとめて事例とともに記載する。

1) 参加者と非参加者の存在

グアテマラ中部高原でも同様に、通常、プロジェクト活動の参加者は限られており、参加者と非参加者の間で格差が生じることが多い。非参加には、(A) 自分の意思で参加をしなかった例、(B) 参加を希望したが、なんらかの理由によって参加できなかった例、(C) 参加したが、途中で脱退した例の 3 種類がみられた。また、(B) や (C) の非参加者が生じた理由として、本件では、参加要件や地理的原因により参加が制限された事例や、周囲による反対により参加が制限された事例が見られた。こうした格差は、男女間だけではなく同性間においても生じている。

**BOX3-34 POWER に地理的問題により参加できなかった女性達の事例
(参加条件による非参加の事例1 ネパール)**

POWER を始めた際は、住民集会において識字教室の実施時間と実施場所を決めてから POWER メンバーを決定した。自分のワードでは、夜より朝の方が家を空けやすいということで、朝 6 時から 8 時までの実施に決まった。場所は二箇所の候補が上がったが、希望者の人数が多かったため、自分達のトールが選ばれた。もう一つの候補になったトールは自分のトールからはとても遠く、通うことは難しいと思ったので、自分のところが選ばれて良かった。

その後、参加条件に沿った女性がメンバーとして決定された。しかし、上の識字教室開催の条件により、希望者のうち 16 人ほどが参加を希望したにも関わらず、出席できなかった。そのうち 9 人は遠い方のトールに住んでいる女性たちだった。彼女達は、会議が終了するまでずっと文句を言っていた。

(POWER メンバー ワード 6 42 歳)

POWER グループは、各ワードに一つのみ設置することがプロジェクトによって決められており、人数も上限が 30 名と制限されていたため、参加希望者が多い地域では住民集会や WCC によって参加者の選定がおこなわれた。BOX3-34 は、その選定によって非参加者が発生した事例である。この事例のようにして一度決定されたメンバーは、途中での交代や補充が認められていなかった。また、POWER グループの参加は非識字者に限られており、多少の就学経験のある女性は実際には読み書きができなくても除外された。BOX3-35 は、そうした参加者の選定条件によって参加ができなかった女性と参加者間に格差が生じた事例である。

**BOX3-35 人数制限により POWER に参加できなかった女性達の事例
(参加条件による非参加の事例2 ネパール)**

自分たちのワードでは、POWER への参加資格に合った希望者が 30 人以上いた。住民集会においてメンバー選定の話し合いの後、WCC がメンバーを決定した。WCC は、途中脱退者が多いとプロジェクトからの WCC への評価が下がるのではないかと恐れ、必ず脱退しないことを本人と家族に確認してからメンバーとした。それによって参加できなかった人はいると思う。他に、ほんの少しでも就学経験のある女性は、読み書きができなくても除外されてしまった。一度メンバーになれないと、メンバー交代や途中入会ができないので、識字教室以外の貯蓄やクレジット、生計向上といった活動にも参加できないので、とてもうらやましがっている。とくにスタディツアーに参加できないことを、とても残念がっていた。

(POWER メンバー ワード 1 32 歳)

BOX3-35 では、周囲の理解がなかったこと（夫の反対など）による非参加者の存在も語られている。上記のように、周囲が原因で、参加を希望したにも関わらず参加を阻止された事例のほかに、BOX3-27 の事例のように、途中で脱退してしまった事例もみられた。また、男性の非識字者には何の取り組みもされなかった。そのため、BOX3-36 のような意見も聞かれた。

**BOX3-36 男性非識字者は POWER のような能力向上の取り組みがなかった事例
(参加条件による非参加の事例3 ネパール)**

村には非識字の男性も多くいる。プロジェクトが社会ジェンダー公正に重点を置いていると皆知っているのに、女性にだけ POWER があることに文句を言う人はいない。しかし、特に OC 男性には非識字者が多い。そのため男性用の POWER が始まったら是非参加したいと言ってる男性はいる。また、男性用がないために、妻の活動参加をひがんで、よけい、妻の参加に対して暴力をふるったりしている世帯もあるので、男性用もあたらればよかっただろう。

(リミタナ村 MOT 20代 男性)

このように、参加の希望者もしくは有資格者でありながら、ジェンダー状況（世帯の状況、就学年数、性別）や地理的状況が理由により参加ができなかったことが、参加者との格差の原因となった事例がある。しかし、参加によって必ずエンパワーメントが生じるものではない。逆に、非参加によってエンパワーメントが生じることがある。例えば、BOX3-37 のように、POWER に参加できなかったアマサムハのメンバー達が WCC に働きかけをして、自分達のニーズに沿った地域社会開発事業を主体的に実施した事例である。この事例では、BOX3-34 で語られている、POWER に参加できなかった女性達が奮起してコミュニティに働きかけ、コミュニティとの関係性を変化させたという、非参加によるエンパワーメントの側面がみられる。この地域では、POWER が主体的になって地域社会開発事業を実施した例はなく、ワードで初の女性主体の地域社会開発事業となった。この事例では、同時に、WCC が変化して女性が意見を言えるようになってきたというコミュニティレベルのエンパワーメントの側面も見られる。

**BOX3-37 POWER に参加できなかった女性グループが主体的に事業を実施した事例
(非参加によるコミュニティレベルのエンパワーメントの事例 ネパール)**

プムディブムディ村のワード 6 は、大きく二つのトールに分かれており、POWER の識字教室はそのうちの一つで開催されることになった。二つのトールは地理的に離れており、相互に頻繁に行き来することは難しい。POWER は山の上のトールで形成された。そのため、山の下の方のトールの女性達は、POWER に参加できなかった。

しかし、山の下の方のトールにはとても活動的なアマサムハがあった。山の上の方の女性達が POWER によって便益を受けていることに奮起したこのアマサムハは、WCC に直接働きかけて、自分達が頻繁に利用する場所に橋を建設するサブプロジェクトを提案した。結局採用され、アマサムハの主導によりこの橋が建設され、今では村の多くの人々が便益を受けている。

(プムディブムディ MOT 20代女性)

2) 参加者のジェンダー状況の違い

上記のように、特定の活動への参加によって必ずしもエンパワーメントが起こるわけではない。そこには、参加の態度や参加によって受ける変化の違いが見られた。

例えば、WCC の会合や活動への女性の参加が促進され、POWER の代表 2 名がメンバーとなった。しかし、BOX3-31 のように、POWER の代表が WCC において意思を発表する機会は限られていた例も多い。例えば BOX3-38 のように、男女のニーズの違いにより WCC において POWER の意見が採用されず、POWER の女性達が困難に面している事例である。

BOX3-38 男女のニーズの違いが事業の意思決定に反映されなかった事例 (ジェンダー状況の違いによる参加男女の態度の違いの事例 1 ネパール)

サブプロジェクトの一つとして作られた共同水場は、山の下の方の歩道沿いに設置された。これは、男性達が、歩道の先のストゥーパ（仏塔）に行く人のために歩道沿いに水場が必要だと判断したからだ。しかし、女性達は村の上の方に共同水場を作ってほしかった。なぜならそこには家がたくさんあるからだ。

結局、水源が遠いため、下の方の水道は水が出なくなってしまった。家では自分達が食べる分の野菜もないので野菜を栽培したいが、水が近くにならないため栽培できない。

(POWER メンバー ワード 1 35 歳)

また、WCC の会合で女性が発言する場合、その多くが、教育レベルやカーストの高い、社会活動への参加の経験がすでにある女性達であった。そうした女性達のニーズは、必ずしも他の POWER メンバーと同じものではなかった。BOX3-39 は、女性がセクレタリーとして、活発に活動している WCC においても、OC である女性の意見は、採用されないという、女性間の格差が生じている事例である。同時に、女性間でも学校に対するニーズが異なることを示している。

BOX3-39 同性間のニーズの違いのため WCC で POWER の意思が反映されない事例 (ジェンダー状況の違いによる参加女性間の態度の違いの事例 ネパール)

自分のワードでは、現在公立学校の先生が不足している。子供のいる世帯から資金を集めて先生を雇用したいと思ったが、貧困家庭も多く、資金が足りない。そのため、WCC から資金支援を受けたいと思った。でも、WCC は興味を持ってくれない。

たいてい、WCC は OC 以外が中心になっており、OC である自分達の代表の話は聞いてもらえない。多くの男性メンバーは、子どもの教育や学校についての興味も低い。WCC のセクレタリーは女性だが、OC ではない。プロジェクトから OC への差別はしてはいけいと言われてきたけれど、人はすぐには変わらない。また、公立学校は OC など貧乏な家庭の子どもが中心に通っていて、お金に余裕がある家の子たちは近くの村の私立学校に通っている。そのため、裕福な WCC のメンバーは公立学校の話に興味を持ってくれない。OC である自分達の POWER の代表は何も言えなくなってしまう。

結局、POWER の資金からハーブ栽培のための種を購入し、ハーブの代金で教員を雇

うことにした。しかし、いつまで続くかわからず、非常に不安だ。

(POWER メンバー ワード 6 50 代 00)

この事例では、支援を受けられなかったことにより、女性達が自分達でハーブを栽培するという収入向上活動を始めたという、経済的なエンパワーメントの側面も見られる。

この他に、参加の動機によっても参加の態度が違う事例もみられた。例えば、UG への参加は受益者全員と決められていた。こうした動機はジェンダーによって違いが見られた。

例えば、UG の参加者は世帯単位で参加した。実際に UG の意思決定をおこなっていたのは 3 人の委員会と WCC だったため、大半のメンバーは意思決定に参加せず、事業実施への労働貢献をするだけの参加であった。BOX3-40 でみられるように、こうした義務としての参加には主体性が見られないことが多かった。さらに、世帯に一人の参加と決められたことで、実際には夫婦で交代で参加した場合でも女性への情報が制限されていた。

**BOX3-40 夫に言われて能動的に事業実施のための労働提供をした女性の事例
(ジェンダー状況の違いによる参加男女の態度の違いの事例 2 ネパール)**

UG では、一世帯に一人労働提供をしないといけなかった。夫が女性も働くべきだと言ったので参加した。その当時、まだ POWER は結成される前であり、プロジェクトについても何も知らなかった。わからないまま労働提供をした。のちに POWER のメンバーになってからプロジェクトについて理解した。

(POWER メンバー ワード 6 50 代 00)

POWER 活動への出席率を上げるために、欠席者や脱退者に罰則をつくり、罰金を払わせることで参加を促進した事例がみられた。こうした取り組みは、プロジェクト側から働きかけられたものではなく、グループ内で決定されていた。しかし、罰金への恐怖といった動機による参加が、女性個人のエンパワーメントに結果としてどのような正負の影響を与えたのかは明白ではない。

BOX3-40 の事例のように、義務であった労働提供に対し、参加によって生じた変化がジェンダーによって違う場合があった。BOX3-41 の事例では、義務で提供した労働に対して、WCC により賃金に男女の格差が設定された。そのため、事業へ参加したことによって男女間の経済的な格差が生じた。

**BOX3-41 義務化された労働貢献の報酬額が男女で格差が設定されていた事例
(参加によって生じる変化の男女格差の事例 ネパール)**

労働は、男女ともにした。POWER としても POWER の資金を提供した。労働に対して賃金が出たが、男性は 150 ルピー、女性が 50 ルピーだった。金額は男性が決めた。

村の外で働くと、男性は 180 ルピーもらえるので、それほどたくさんではない。女性が女性の賃金について全体集会で文句を言ったら、「そんなことを言うと罰せられるぞ」と言われた。女性は 50 ルピーで強制的に労働をさせられたのだから、十分ではなかった。女性にも 100 ルピーくらいは払われるべきだったと思う。

(POWER メンバー ワード 6 50 代 OC)

こうした参加の態度の違いや、参加によって生じる変化の違いは、POWER のメンバー間などといった同性間にも生じる。この案件では、POWER 自体の活動の内容や活発さに地域やグループ間で違いがみられた事例と、同じ POWER グループ間でメンバーのジェンダーの違いにより格差が生じた事例がみられた。

BOX3-42 の事例は、プロジェクトによって同じ内容の働きかけがおこなわれたとしても、地域によって異なる変化が生じることがあることを示している。この相違は、地域の置かれている地理的状況や、外部機関との接触の度合い、地域内のジェンダー内（同じカーストの女性の間）の確執などによって生じていた。

**BOX3-42 グループ活動の経験が未熟で POWER 活動が成功しなかった地域の事例
(参加によって生じる変化の地域間格差の事例 ネパール)**

サルコラ村では、どのワードでも、全体的に活動が活発ではない。もっとも活動が円滑に進んでいないのは、ワード 2 の POWER グループだ。ここでは、POWER 内でチェットリの二つの違うグループが対立しており、活動に関する決定ができない。例えば、生計向上活動はプロジェクトから資金を受け取ったにも関わらず、活動内容が決定できていない。OC のメンバーはその対立に挟まれて発言すらできない状態だ。自分や MLT も POWER の会議にはすべて参加しているが、仲裁しきれない。WCC にも働きかけているが、WCC 自体が弱体であり、WCC 内にも同様の対立がみられる。

サルコラ村は、ポカラやパルパット郡の中心から非常に遠方にあるため、今までほとんど外部からの支援を受けたことがない。そのためグループ活動の経験がなく、皆どうやっていいのかわからないのだ。自分の出身村であるサルコラ村がポカラに近いブムディブムディ村と同じ活動をして、成功しない。

(サルコラ村 MOT 20 代 男性)

また、BOX3-43 のように、識字教室への参加においても、高齢のメンバーは読み書きの習得の速度や意欲が低く、他のメンバーと比較して変化があまり見られないという事例もみられた。

**BOX3-43 POWER に参加してもプラスの変化がみられない女性の事例
(参加によって生じる変化の女性間の格差の事例 ネパール)**

識字に参加しても、読み書きがいまだにできない女性はいる。夫の暴力のためにあまり識字教室に出席できない二人の女性だ。他にも、高齢の女性は目が悪くなっており、あまり字が見えない。そのため、読み書きが進歩していない。

(リミタナ村 MOT 男性 20 代)

3) ジェンダー視点に立った取り組み対象

本件では、ジェンダー視点に立った取り組みは POWER メンバーと WCC に対してのみおこなわれ、UG にはおこなわれなかった。WCC は意思決定機関であり、地域住民の一部の代表がメンバーとなっている。また、POWER の参加は 30 名の非識字女性に限られていたことは前項で述べたとおりである。本項では、このようにジェンダー視点に立った取り組みが一部の住民のみに対しておこなわれ、対象者が偏っていたことによって生じたマイナスのエンパワーメントについて述べる。

プロジェクトは、非識字女性などの社会的弱者に対して優先的に POWER 活動を実施した。この POWER グループでは、メンバー全員に対して識字教室、ジェンダー認識向上の研修やスタディツアー、貯蓄やクレジット制度を活用した生計向上の取り組みがおこなわれたことは、前述のとおりである。しかし、BOX3-34、35、36 のように、POWER への参加者の選定条件が一部のジェンダーに偏っていたために、社会的弱者であっても排除されてしまった女性や男性が存在した。

また、POWER メンバー以外へのジェンダー視点に立った取り組みは、WCC メンバーへのジェンダー認識向上のための研修とスタディツアーであった。しかし、WCC のメンバーは、10 名程度であり、そうした取り組みを受けられたのは、地域の住民の中のほんの一部であった。BOX3-23 のように、本件への多くの参加者が所属した UG には何の取り組みもなされなかった。取り組みがなされなかったことで地域社会に格差を生じさせただけでなく、BOX3-44 のようにプロジェクト活動の自立発展性が低下した事例がみられた。

BOX3-44 男性対象のジェンダー視点に立った取り組みが限定的であった事例 (ジェンダー視点に立った取り組みが限定的であったために自立発展性が低下した事例 ネパール)

モチベーターとして、POWER グループの活動支援をおこなっている。その一貫として、POWER への参加を夫に反対され参加が滞っている女性の家などに行き、参加するよう説得をすることもよくある。しかし、参加を促進したり説得したりしても、家族が阻止するとそれ以上は働きかけられないし、大きな変化を起こすことは難しい。ジェンダー平等を引き起こすのであれば、女性だけでなく、家族も対象にジェンダー認識向上に取り組まないと効果がないと実感している。

(リミタナ村 MOT 20 代男性)

女性のみを対象とした POWER を通じた取り組みは、それまで社会活動への参加がしにくかった社会的弱者が地域社会開発事業へのアクセスやそのための能力向上を受ける機会を得たものであり、こうした格差を生じた一方で、それなりの大きな効果があったことは前項で述べたとおりである。

3.3.5. 分析結果の考察

次に、これまでの分析結果を住民参加とジェンダー視点から考察する。

(1) 住民参加に関する考察

本件は、住民参加がプロジェクト目標達成の重要要素であることが、計画段階から明確に位置づけられていた。また、既存の住民の意思決定機関（WDC）を活用し、それを含んだ形での新たな住民の意思決定機関（WCC）を作成した。それを通じて、既存の地域社会のしくみに沿った形での住民参加を通じた協力をおこなう配慮がなされた。そのため、案件が地域社会開発として目指していた村落資源管理のための地域レベルの計画を、策定段階から住民によっておこなった。プロジェクト活動の中心は、そこで策定された計画をもとにした、サブプロジェクトと呼ばれる地域社会開発事業の実施であった。事業は、案件によって作られた UG と POWER という住民組織を通じて、WCC の支援のもとにおこなわれた。この事業の維持管理やモニタリングは WCC によっておこなわれた。こうした住民の活動は、モチベーターと MLT によって緻密な支援のもとにおこなわれた。

こうして、事業実施のすべてのプロセスが住民参加型アプローチによっておこなわれた本件は、事業による便益や事業参加を通じた能力向上により、地域社会に個人・世帯・コミュニティの全レベルにおいてプラスの変化をもたらした。

一方で、案件によって生じた格差もみられた。プロジェクトでは参加者のジェンダーに配慮し、社会的弱者の参加に対して優先順位や数値目標を設定して参加を促進した。しかし、参加の形態は一樣ではなく、エンパワーメントに結びつく参加には限界があった。同様に、UG への労働貢献を通じた参加は受益者全員に義務化されていた一方で、UG の活動の意思決定は一部のジェンダー（男性）に限られていた。こうした意思決定を伴わない参加においては、エンパワーメントには限界があった。

活動の中には、社会的弱者のみを対象に、研修や事業を通じた直接的エンパワーメントを目指したものがあった。すなわち POWER グループ活動である。しかし、この活動の参加には、人数（30 人）や参加要件（非識字者）に制限があった。また、地理的理由や周囲の反対により参加を断念したケースもあった。そのために、非参加者と参加者との格差が、案件を実施することによって拡大した。こうした参加者の偏りは、地域社会に格差を生じさせるのみならず、事業やグループ活動、ひいては地域社会全体の自立発展を妨げる原因となっていた。

（２）ジェンダー視点に立った取り組みに関する考察

本件は、プロジェクト目標達成のためにジェンダー視点が重要要素であることが、計画段階から明確に位置づけられていた。そのために、上記のように POWER を通じた社会的弱者である女性へのエンパワーメントの取り組みがなされた。また、WCC や POWER に対し、ジェンダー認識向上のための働きかけをおこなった。こうしたプロジェクトの取り組みは、上記のような個人レベルのエンパワーメントだけでなく、世帯やコミュニティレベルでのジェンダー関係の変化や格差の是正に貢献した。

一方で、こうしたジェンダー視点に立った取り組みは、対象地域の住民の一部に限られていた。POWER グループの参加者が偏っていたことは、上記の通りである。また、ジェンダー認識向上の取り組みは WCC と POWER のみにおこなわれ、多くの住民（主に男性）が参加した UG には何の取り組みもなされなかった。結果として、多くの住民がジェンダー視点に立った取り組みを直接享受することができなかった。そのため、ジェンダー視点に立った取り組みによる便益が受けられず、格差が生じたばかりか、地域社会の自立発展性を低下させた事例もみられた。

（３）プロジェクト目標との関係性に関する考察

この案件は、ネパールの山間地域に適用可能な、住民による企画、実施、モニタリング評価への積極的な参加を伴う、「公正で持続的な住民参加型・村落資源管理モデル」の開発を目ざした。成果としては、ジェンダー視点に立った住民の組織運営及び事業実施能力の向上と、C/P の能力向上が想定された。また、上位目標にあたる長期的な地域社会開発の目標としては、住民男女による村落資源の適正な管理を通じた貧困緩和と自然環境の改善をめざした。

ここでは、住民の積極的な参加による村落資源管理モデルの開発とジェンダー視点に立った取り組みの関係性について考察する。

本件において開発された住民参加型の村落資源管理モデルの基本的な構成要素は、WCC の設置、WCC による村落開発計画（資源管理計画）の策定、村落開発計画（資源管理計画）に基づく UG によるサブプロジェクトの実施、POWER グループを通じた女性の能力向上と地域社会開発事業への参加促進などである。ジェンダー視点に立った取組みとしては、WCC メンバーへのジェンダー認識向上、POWER グループの形成と POWER 代表の WCC という意思決定機関へ参加の促進、などがあげられる。

さらに、POWER グループ活動は、社会活動や意思決定過程への参加が困難だった女性達にとって、地域社会開発事業への参加を促し、参加を通じた能力の向上、エンパワーメントにつながった。また、村落の意思決定機関である WCC

へ POWER のメンバーの女性が参加することにより、徐々に、POWER メンバーの女性達の意思が村の中枢の意思決定に届くようになり、整えられた。また、プロジェクトにより、WCC メンバー（男女）に対してジェンダー認識向上の直接的な働きかけがおこなわれたことにより、村落の意思決定者のジェンダー認識が変革した。WCC メンバーが POWER グループや低カーストなどの社会的弱者への意識を変革することにより、村落資源管理への取り組みやコミュニティレベルのエンパワーメントを促進することに貢献した。

また、こうした住民参加型アプローチおよびエンパワーメントを促進することにつながるような活動は、地域住民のなかからプロジェクトに採用されたモチベーターと、C/P 機関のスタッフである MLT によって一層促進された。前項で確認したように、モチベーターのエンパワーメントが、プロジェクトのジェンダー視点に立った取り組みおよびさまざまなエンパワーメントを促進している事例もみられた。

一方で、こうした POWER を通じた取り組みは一部の住民のみを対象とされたため、すべての住民を対象にした公平な参加の促進や能力向上がおこなわれたわけではない。また、希望しても参加条件により参加できなかった住民男女も存在した。さらに、男性の社会的弱者（低カーストや非識字者など）への取り組みはなされなかった。そのために、逆に世帯内および地域社会において、ジェンダー間、およびジェンダー内格差を生じさせてしまった事例もみられた。さらに、プロジェクト活動の大半を占めた UG を通じたサブプロジェクト活動への参加や実施については、ジェンダー視点に立った取り組みがおこなわれず、ジェンダーに関するエンパワーメントが生じていない、もしくは地域社会に格差を生じさせる等のマイナスのエンパワーメントを発生した事例が見られた。

このように、プロジェクトが目指した「公正で持続的な住民参加型・村落資源管理モデル」は、特定の地域社会開発活動への住民の参加や一定のエンパワーメントを促進した。また、仲介的なファシリテーターの役割を果たすモチベーターや地方政府レベルの C/P の能力向上ならびにエンパワーメントを通じて、公正で持続的な地域開発への努力が促進されたと考えられる。したがって、住民の積極的な参加による村落資源管理モデルの一定の方向性が明確になったと判断できる。しかし、いくつかの事例を通じて明確になったように、予期しなかったにもかかわらず生じた正負の影響や、ジェンダー内、ジェンダー間格差に対する分析や検討、格差是正のための対応策や取り組みが考察されていれば、プロジェクト目標が目指したモデルのさらなる確立につながっていたのではないと思われる。